

国内最北の発見 チャシコツの神功開宝

平河内 毅



予想される神功開宝の搬入経路

昨年9月、ウトロにてオホーツク文化期の集落跡を発掘中、思わぬ大発見に恵まれました。なんと、奈良時代に畿内で鑄造された銅銭「神功開宝(じんぐうかいほう)」が見つかったのです。この話題は全国に報道され、オホーツク文化集団と律令国家との間に何らかの交流があった可能性が示されました。今回はチャシコツ岬上遺跡で見つかった1枚の古銭について考えてみます。

中継地は石狩低地帯？

そもそも、神功開宝とは奈良時代から平安時代にかけて日本で次々と発行された12枚の貨幣(皇朝十二銭)の1つで、3番目の765年に鑄造されたものです。皇朝十二銭の発見例は北海道では石狩低地帯に偏る傾向があります。また、千歳市の遺跡からはオホーツク土器が見つかっており、石狩低地帯こそがオホーツク文化集団と律令国家を結ぶ中継地だったと考えられます。

おそらく、刀子などの鉄製品を擦文文化集団から入手する際に、神功開宝も一緒にオホーツク文化集団に渡ったのでしょう。

お金？それともまじないの道具？

皇朝十二銭は畿内周辺では通貨として流通しましたが、その域外では別の用途に使われていました。秋田城では子どもの健やかな成長を祈願して、5枚の貨幣とともに胎盤を納めた壺が発掘されています。また、道央部の擦文時代の遺跡では竪穴住居跡の近くから2枚の貨幣が見つかっており、建築儀礼に用いたと考えられています。このように、まじないの道具として用いられていたようですが、オホーツク文化ではどうでしょうか。

たった1枚しか見つからないことから限られた人しか手にできなかったことは確かです。考えられる利用法は、(1)自らの権威を表す宝物、(2)装身具の一部、(3)まじない

の道具、といったところでしょうか。

しかし、神功開宝が見つかった場所は生ゴミや壊れた道具が集められた廃棄場です。何らかの利用の後に廃棄場に混入したと考えられますが、最初からゴミとして捨ててしまったとも捉えられます。1枚の古銭をめぐって様々な想像が膨らみますが、今後の詳細な分析と研究によって、廃棄場に放られた真の意図が明らかになるのが楽しみです。

それにしても、5,600 m²の遺跡内のわずか3 m²の調査区から見つかったことは幸運としか言いようがなく、調査区が1 cmでもズレしていたら今も地中深くに眠ったままだったかもしれません。このような、不思議なめぐり合わせにも古代のロマンを感じます。

発行 2017年1月25日
発行所 知床博物館協会の会
099-4113 北海道斜里郡斜里町本町49
斜里町立知床博物館内
TEL: 0152-23-1256 FAX: 0152-23-1257